

教師の成長と役割意識に関する研究

原 岡 一 馬

問 題

教育効果は、教師と子どもの相互作用によって生み出されることはいうまでもない。教育効果についてのこれまでの研究の多くは、主として子どもの側の変化だけに焦点をあてており、相互作用を重要な要因として認めてはいるものの、教師の成長や特性、行動などに主要な焦点を当てたものは少ない。

その意味で、教師自身の成長や態度がどのようにになっているかを確認し、それが教育効果にどのように影響しているかを吟味する必要がある。原岡(1989)は、教師の成長に焦点を当て、その次元と構成を探っている。ここでは、まず、教師の成長と関連ある内容をできるだけ多く集め、KJ法を用いて構造化したあと、できるだけ幅広い範囲の内容を含みながら重なり合いのないような質問項目を95項目つくり、119名の中学教師に5段階で回答してもらっている。

その結果を因子分析法を用いて分析し、教師の成長に関する3つの因子、すなわち、第Ⅰ因子「子どもとの接触と幅広い人間的成長」、第Ⅱ因子「同僚・先輩・職場の雰囲気による成長」、第Ⅲ因子「学習指導・学級経営力の向上」を見出し、さらに、それぞれの因子を測定する3つの尺度をかなりの信頼性と妥当性をもって構成している。

さらに、教師の成長の3つの因子得点と2つの教師の役割意識因子得点との相関関係を吟味し、また、教師の役割意識調査の10個の質問への反応の関係も具体的に分析して、合わせて検討している。

その結果、一般に教師は、第Ⅰ因子の成長度は高いが、第Ⅱ因子は中間で、第Ⅲ因子の成長度は低かった。さらに、教師の成長についての第Ⅰ因子、「子どもとの接触と幅広い人間的成長」は、教科内容を十分理解させることや学級管理をうまくやることを除いて、すべての役割において高く評価した者ほど成長があったとし、また、第Ⅱ因子の「同僚・先輩・職場の雰囲気による成長」は、すべての教師の役割において高く評価した者ほど高い成

長を示していたことを見出した。

第Ⅲ因子の「学習指導・学級経営力の向上」については、教師の役割意識や態度とは関連が薄く、経験年数や性別に関連があるとし、しかも、その関連は、経験年数が中程度、すなわち、6年から11年ぐらいで低下し、その後には上がっていく傾向を見出している。また、男性が女性よりも高い傾向があった。

以上のことから、教師の成長は、教師の役割意識などその個人の主体的態度に影響される主要な部分と、客観的経験年数などにより形成される学級経営技術などの部分があるものと考えられ、単に教育経験を積むだけでは教師の成長は得られないことを示したものとしている。

しかし、前研究(1989)は、中学教師だけを対象に行っているため、得られた結果が教師の成長の全体像を十分包含していたわけではなく、部分的なものであったとも思われる。したがって、本研究では、小学校教師の結果も加えて、より包括的で、信頼性の高い資料を得るとともに、①教師の成長の実態、②教師の成長の構造、③教師の成長と役割意識の関係を吟味することにする。

具体的には、教師の成長がどのようになっており、どのような構造をなしているかを、小・中学校の教師を対象に、前研究(1989)で用いた質問項目を用いて調査し、その結果を因子分析して、教師の成長を構成している次元を明確にし、それらの次元における違いが、性別、小・中学校の違い、経験年数の違いなどによってどのようになっているかを確認すると共に、教師の役割と思われる10個の役割とどのような関係をなしているかを吟味することを目的とする。

方 法

まず、前研究において作成した95個の質問項目を用いて、これをランダムな順序に並べ換え郵送法で回答を求めた。回答の方法は前回と同様に、①そう思う、②やや思う、③どちらともいえない、④あまり思わない、⑤思わない、の5段階の選択法で回答してもらうことにした。回答率は72.3%であった。

またこれとは別に、教師の成長の構造と教師の役割との関係を吟味するため、教師の役割と思われる10個の調査項目、すなわち、①教科内容を十分理解させること、②子どものモデルとなる行動をすること、③学級管理をうまくやること、④カウンセラーの役割をとること、⑤子ども集団のリーダーとなること、⑥社会的規範や文化を伝達すること、⑦父母や地域の人に学校の立場を理解してもらうこと、⑧子どもを理解すること、⑨仕事に魅力をもち満足感をもつこと、⑩精神的にも経済的にも安定すること、についての質問を付け加えた。これへの回答も成長の項目への回答と同様、①そう思う、②やや思う、③どちらともいえない、④あまり思わない、⑤思わない、の5段階の選択法で回答してもらった。

被調査者

全回答者数は小・中学教師合わせて 293名であったが、

すべての項目に有効な回答をした者は 237名で、経験年数1年未満の者から20年以上の者までわたっていた。したがって、分析にはすべての項目に有効回答した 237名の資料を基にして行うことにする。その内訳は Table 1 および Table 2 の通りである。

結果と考察

(1) 教師の成長の項目に対する反応平均と標準偏差

個々の項目に対する反応を「そう思う」5点、「やや思う」4点、「どちらともいえない」3点、「あまり思わない」2点、「思わない」1点として平均とSDを算出した。結果は Table 3 に示す通りである。

(2) 教師の成長の実態

上記95項目の成長項目への回答のうち、特に目立って

Table 1 被調査者の性別・経験年数別分布 (数値は実人数)

	0-2年	3-5年	6-8年	9-11年	12-14年	15-17年	18-20年	20年以上	計
男性	5	17	13	21	28	19	15	22	140
女性	12	11	7	20	19	11	7	10	97
計	17	28	20	41	47	30	22	32	237

Table 2 被調査者の学校別・経験年数別分布 (数値は実人数)

	0-2年	3-5年	6-8年	9-11年	12-14年	15-17年	18-20年	20年以上	計
小学	11	11	7	20	23	17	15	27	131
中学	6	17	13	21	24	13	7	5	106
計	17	28	20	41	47	30	22	32	237

Table 3 教師の成長についての質問項目への反応

項目	Mean	SD
1. 何とか思いどおりの授業ができるようになった。……………	3.15	1.14
2. 子どもと接することによって、子どもの気持ちが理解できるようになった。……………	3.93	0.88
3. さまざまな場面で失敗と反省を繰り返すことによって成長してきた。……………	4.35	0.88
4. いろいろな趣味をもつことによって、人間的幅が広がった。……………	3.61	1.14
5. 他の先生たちの努力する姿が刺激となり、自分も大いに影響された。……………	4.24	0.91
6. 自分の指導の効果が子どもに見られるようになった。……………	3.54	0.91
7. 子どもと多く接触したからといって、良い指導ができるとは限らない。……………	2.95	1.30
8. 失敗の繰り返しばかりで、なかなか成長できない。……………	2.95	1.22

9. 多くの友人をもつことによって、自己成長がなされた。……………	3.94	0.98
10. 学校の雰囲気自分に合わないので、やる気をなくすことがある。……………	2.77	1.31
11. 自分の指導に対し、子どもが手ごたえある反応をするようになってきた。……………	3.61	0.88
12. 子どもたちの反応から指導の仕方や関わり方が次第にわかってきた。……………	4.01	0.81
13. 努力してもなかなか成長できず悩んでいる。……………	3.10	1.17
14. 自分の生活を大事にすることによって自己成長がなされた。……………	3.11	1.05
15. 他の先生たちが自分の努力を認めてくれることが自分の成長のきっかけになった。……………	3.67	1.03
16. 自分なりの学級経営ができるようになってきた。……………	3.58	1.05
17. 子どもの生活の中へ入っていけばいくほど、指導の在り方がわからなくなる。……………	2.74	1.08
18. 自分が成長しているかどうか自分ではわからない。……………	2.88	1.15
19. 自分の行動や生活態度などいつも反省するよう努めている。……………	4.05	0.90
20. 努力しないと自分だけとり残されそうなので頑張っている。……………	3.38	1.10
21. 納得いく教科指導ができるようになってきた。……………	2.97	1.08
22. ある子どもとの関係から学んだことが他の子どもの教育に役立っている。……………	4.06	0.84
23. 自分で目標をたて、常にその実践に向けて努力している。……………	3.63	0.86
24. できるだけ幅広い分野へ興味や関心をもつよう努めている。……………	4.05	0.96
25. 自分だけ努力しても、他の教師が努力しないので教育効果が上がらない。……………	2.50	1.16
26. 目的に応じ適切な指導法を用いることができるようになってきた。……………	3.31	0.94
27. 子どもの行動の観察から指導の在り方を学ぶことができた。……………	3.95	0.80
28. 自分に課題を課すことによって、自己規制に努めている。……………	3.42	1.01
29. 専門的知識だけでなく、幅広い分野の知識を得るよう心がけている。……………	4.11	0.89
30. 自分だけ努力しても、他の教師から浮き上がってしまうので何もできない。……………	2.08	0.98
31. 押し付けたり脅したりしないで、子どもを指導していける自信がついた。……………	3.16	1.05
32. 子どもの立場に立ってみてはじめて、子どもの気持ちや考え方が理解できるようになった。……………	3.78	0.92
33. 努力すれば成長するとわかっていても、すぐ安易な方法をとってしまう。……………	3.34	1.02
34. 教育のことだけでなく、幅広い人間になるよう努めている。……………	4.20	0.91
35. 他の教師と違ったことをやろうとすると陰口を言われるので、やりたいことができない。……………	2.18	1.01
36. 子どもの理解力に応じ、自然に指導法を変えることができるようになった。……………	3.53	0.91
37. 子どもに密着していると、かえって子どもの真の姿を見失うことがある。……………	2.85	1.12
38. 自分の持ち味を最大限に生かすよう全力で事にあたるよう努めている。……………	3.98	0.88
39. 教育以外の分野にも、幅広い視野をもつことが大切だと感じる。……………	4.64	0.65
40. 職場に、一人ひとりの自主性を尊重する雰囲気がないのでやる気がしない。……………	2.28	1.10
41. 授業を通して、その子に応じた何かを教えられるようになった。……………	3.33	0.97
42. 子どもと一緒に学習することが、自分の成長にもなった。……………	4.07	0.87
43. 現状の子どもの姿に満足せず、より高い成長を考えている。……………	4.22	0.81
44. 一般社会の領域にも関心や問題意識をもつようになった。……………	4.05	0.90
45. 先生方の考えがみんなばらばらなので、教育効果が上がらない。……………	2.54	1.13
46. 研修会に参加することによって、生徒への接し方や指導法が向上した。……………	3.57	1.14
47. 子どもたちとの日常のふれあいから多くのことを学び、人間的に豊かになった。……………	3.76	0.89
48. 子どもの成長を考え実践していくうちに、自分の成長に気づくことがある。……………	3.71	0.91
49. 新しい社会の流れをとらえて、適切な指導ができるようになった。……………	3.05	0.84
50. みんなが協力して良い教育をしようと努めるので、自分も努力するようになった。……………	3.49	0.91
51. いろんな先生の指導法を見ることによって自分の指導法が向上した。……………	4.08	0.83
52. いろいろな子どもに出会うことで子どもの多様性がわかってきた。……………	4.27	0.73
53. 教師になった頃を思い出し、初心に返って努力することがよくある。……………	3.42	1.00
54. 結婚や子育ての経験によって、子どもたちをよりよく理解できるようになった。……………	3.85	1.20

教師の成長と役割意識に関する研究

55. 職場に協力の雰囲気があるので、学校のいろいろな仕事がこなせるようになった。……………	3.43	1.03
56. 教育経験を積むことによって、自分自身人間として成長できた。……………	3.73	0.94
57. 子どもと共に悩み、喜び、励まし合っていくことが自分にとって大切なことがわかった。……	4.09	0.90
58. 自分の役割が何で、今やるべきことは何かがわかるようになった。……………	3.74	0.94
59. 家庭での子どもたちの生活についても理解できるようになった。……………	3.51	0.95
60. 職場に誰でも受容する雰囲気があるので、寛容や忍耐力が身についてきた。……………	3.20	1.00
61. 他の先生方との日頃の接触により自分の成長が促された。……………	3.89	0.90
62. 子どもの教育は子どもと一体になってしまっはできないことがわかった。……………	3.18	1.12
63. 学校外での子どもの行動が理解できるようになった。……………	3.20	0.90
64. どんな先生とも気軽に話せる雰囲気があるので、みんなと協調してやっていける。……………	3.51	1.11
65. 教科指導の方法を学んでいくうちに、専門的知識も深まった。……………	3.73	1.01
66. 読書によって自分を磨くことができた。……………	3.62	1.07
67. 振り返ってみると、子どもの成長と共に自分も成長してきたと感じる。……………	3.75	0.92
68. みんなの教師が仕事に積極的に取り組むので、自分も積極的な心構えができてきた。……………	3.41	0.92
69. 教材研究を徹底して行うことによって、授業がうまくできるようになった。……………	3.48	0.95
70. 一生懸命やってみても、なかなか思い通りの授業ができない。……………	3.53	1.03
71. 研究会やグループ研究を通して自己の成長が促された。……………	3.45	1.09
72. 子どもとともに問題にぶつかることにより、子どもの問題が解決できるようになった。……	3.51	0.88
73. 職場に、一人ひとりを大切にす雰囲気があるので、自分の考えと違う考えでも受け入れ ることができるようになった。……………	3.20	1.00
74. 他の先生の立派な授業を見ても、それを自分の授業に生かすことができない。……………	2.77	1.03
75. いろいろな講演を聞き、自分の弱点がわかるようになった。……………	3.19	1.04
76. 子どもと同じ立場に立ち、子どもを人間として見るようになった。……………	3.94	0.84
77. 努力しても、学級経営はなかなかうまくいかない。……………	3.02	1.14
78. 生徒たちが成長していくにつれ、自分自身の弱点がわかってきた。……………	3.44	0.87
79. 子どもに与える自分の影響力が思っていたより少ないことを知った。……………	2.83	1.15
80. 研修会に出席しても自分の成長につながるようなものはほとんど感じない。……………	2.54	1.08
81. 先輩の先生からいろいろ教えられ、多くのことを学ぶことができた。……………	4.11	0.93
82. 子どもをありのままに受け止め、認めてやる心のゆとりがでてきた。……………	3.65	0.89
83. 研究会やグループ研究に出席しても自分のためになることが少ない。……………	2.60	1.08
84. 同僚の先生との接触によって、多くのことを学ぶことができた。……………	4.04	0.87
85. どの子どもにも良い点を見つけることができるようになった。……………	3.89	0.87
86. 講演を聞いて感動するのはそのときだけで、自分の成長につながるものは少ない。……………	2.63	1.00
87. 経験を積むことで、学級経営のやり方が上手になった。……………	3.65	0.86
88. 子どもの教育にあたって、子ども一人ひとりの個性を尊重することができるようになった。…	3.68	0.81
89. 経験豊かな先生との接触を通して、自分の力量のなさが反省させられた。……………	4.11	0.92
90. 子どもの純粹さや優しさにふれて、自分の弱点に気づくことがあった。……………	3.91	0.91
91. 専門教科を勉強しても授業に生かすことはなかなかできない。……………	2.68	1.15
92. いろいろな学年を担当することによって、教え方や心構えに幅がでてきた。……………	4.10	0.88
93. 子どもを見るだけでは、その子がどのくらい理解できているかわからない。……………	3.27	1.09
94. 研修会や講演会に出たくてもなかなか暇が見出せない。……………	3.57	1.16
95. 勉強しようと思っいていても、雑用に追われてなかなかできない。……………	3.89	1.01

高い反応を示した項目、つまり、平均4.2以上を示した高得点項目と、低い反応を示した項目、つまり、平均2.6以下を示した低得点項目を上げてみると、現実の教師の全体像がわかる。それは、次のとおりである。

a) 高得点項目 (肯定的反応項目)

3) さまざまな場面で失敗と反省を繰り返すことによって成長してきた。5) 他の先生たちの努力する姿が刺激となり、自分も大いに影響された。34) 教育のことだけでなく、幅広い人間になるよう努めている。39) 教育以外の分野にも、幅広い視野をもつことが大切だと感じる。52) いろいろな子どもに出会うことで子どもの多様性がわかってきた。

b) 低得点項目 (否定的反応項目)

25) 自分だけ努力しても、他の教師が努力しないので教育効果が上がらない。30) 自分だけ努力しても、他の教師から浮き上がってしまうので何もできない。35) 他の教師と違ったことをやろうとすると陰口を言われるので、やりたいことができない。40) 職場に、一人ひとりの自主性を尊重する雰囲気がないのでやる気がしない。80) 研修会に出席しても自分の成長につながるようなものはほとんど感じない。

以上のことから、現在の教師たちは、積極的に自己成長を高めるよう努めていることがわかる。特に、一般に問題ではないかと思われるような項目には否定的反応、つまり、低得点を示して、個人も職場も教師の成長を高めるような働きをしているといえよう。

c) 性別

では、教師の成長に性差があるであろうか。各項目への反応の性別による分布差を検討してみると、95項目中、20項目において有意な差がみられた。しかも、その傾向は一貫しており、例えば、項目1では、「何とか思いどおりの授業ができるようになった」に対し、男性の方が女性よりも「そう思う」「やや思う」と答えた割合が多かった。つまり、男性の方が女性より高い教師としての成長度を示している傾向があった。この傾向は、原岡(1989)の研究と同傾向である。

有意な項目番号とその方向、 χ^2 の値および危険率を上げれば Table 4 の通りである。

d) 学校別 (小・中学校比較)

前研究(1989)の中の第1研究において、小学校教師と中学校教師とでは教師の成長度に違った傾向があるのではないかという示唆が得られた。果たしてどうであろうか。各項目に対する反応の分布を小学校教師と中学校教師とで比較し、その差を χ^2 検定によって検定した結果、予想以上に多くの項目で有意差が見出された。すなわち、95項目中69項目に上り(1%以下の危険率を示す

Table 4 各項目反応の性別比較
(有意差を示したもののみ)

項目番号	肯定的反応の方向	χ^2	危険率
Q 1	M>F	10.22	.05>p>.01
Q 2	M>F	11.78	.05>p>.01
Q 4	M>F	13.07	.05>p>.01
Q 6	M>F	10.95	.05>p>.01
Q 9	M>F	13.86	p<.01
Q11	M>F	10.01	.05>p>.01
Q15	M>F	10.92	.05>p>.01
Q16	M>F	18.35	p<.01
Q23	M>F	17.01	p<.01
Q26	M>F	19.21	p<.01
Q41	M>F	10.84	.05>p>.01
Q44	M>F	9.68	.05>p>.01
Q49	M>F	17.97	p<.01
Q55	M>F	12.03	.05>p>.01
Q58	M>F	17.12	p<.01
Q63	M>F	9.98	.05>p>.01
Q71	M>F	21.35	p<.01
Q74 *	F>M	10.25	.05>p>.01
Q82	M>F	9.88	.05>p>.01
Q87	M>F	10.38	.05>p>.01

* 逆得点項目

ものが49項目、5%以下の危険率を示すものが20項目)、大きな違いがあることがわかった。

Table 5 に有意差を示した項目番号とその方向、 χ^2 の値、および危険率を上げることにする。

Table 5 の傾向は、すべての有意差を示した項目において小学校教師の方が中学校教師よりも成長が高くなっており、逆得点項目では否定的反応が多かった。どうしてであろうか。

小学校教育の方が子どもとの接触の度合いが多いためであろうか、全教科指導という授業形態のためであろうか、子どもの発達段階の違いによる指導法の違いによるためであろうか。それとも、学校の雰囲気や教師間の雰囲気の違いによるためであろうか。

いずれにしろ、小学校教師の方が中学校教師より成長の度合いが高くなっている。このことについては、後半の部分で教師の成長の構造や教師の役割意識の面からも検討してみることにする。

Table 5 各項目反応の学校別比較 (有意差を示したもののみ)

項目番号	肯定的反応の方向	χ^2	危険率	項目番号	肯定的反応の方向	χ^2	危険率
Q 2	小>中	31.01	$p<.01$	Q52	小>中	22.45	$p<.01$
Q 3	小>中	10.83	$.05>p>.01$	Q54	小>中	16.30	$p<.01$
Q 6	小>中	20.19	$p<.01$	Q55	小>中	28.89	$p<.01$
Q 9	小>中	12.68	$.05>p>.01$	Q56	小>中	11.50	$.05>p>.01$
Q10*	中>小	15.88	$p<.01$	Q57	小>中	19.00	$p<.01$
Q11	小>中	16.90	$p<.01$	Q58	小>中	15.18	$p<.01$
Q12	小>中	13.56	$p<.01$	Q60	小>中	15.71	$p<.01$
Q16	小>中	25.68	$p<.01$	Q61	小>中	26.83	$p<.01$
Q17*	中>小	33.06	$p<.01$	Q62	小>中	9.82	$.05>p>.01$
Q18*	中>小	12.90	$p<.01$	Q63	小>中	14.21	$p<.01$
Q22	小>中	23.78	$p<.01$	Q64	小>中	26.20	$p<.01$
Q24	小>中	12.26	$.05>p>.01$	Q65	小>中	12.98	$.05>p>.01$
Q25*	中>小	10.49	$.05>p>.01$	Q67	小>中	12.90	$.05>p>.01$
Q26	小>中	11.99	$.05>p>.01$	Q70*	中>小	12.27	$.05>p>.01$
Q27	小>中	19.01	$p<.01$	Q71	小>中	36.68	$p<.01$
Q29	小>中	21.23	$p<.01$	Q72	小>中	20.99	$p<.01$
Q30*	中>小	18.13	$p<.01$	Q73	小>中	16.79	$p<.01$
Q32	小>中	30.50	$p<.01$	Q74*	中>小	15.99	$p<.01$
Q33	小>中	11.52	$.05>p>.01$	Q75	小>中	14.46	$p<.01$
Q34	小>中	15.54	$p<.01$	Q76	小>中	16.07	$p<.01$
Q35*	中>小	15.03	$p<.01$	Q77*	中>小	12.28	$.05>p>.01$
Q36	小>中	12.42	$.05>p>.01$	Q79*	中>小	28.57	$p<.01$
Q38	小>中	12.46	$.05>p>.01$	Q80*	中>小	28.39	$p<.01$
Q39	小>中	29.96	$p<.01$	Q81	小>中	19.82	$p<.01$
Q40*	中>小	35.64	$p<.01$	Q82	小>中	21.41	$p<.01$
Q41	小>中	10.76	$.05>p>.01$	Q83*	中>小	25.80	$p<.01$
Q42	小>中	25.21	$p<.01$	Q84	小>中	24.03	$p<.01$
Q43	小>中	12.97	$.05>p>.01$	Q85	小>中	34.91	$p<.01$
Q44	小>中	11.38	$.05>p>.01$	Q87	小>中	28.79	$p<.01$
Q45*	中>小	16.87	$p<.01$	Q88	小>中	24.22	$p<.01$
Q46	小>中	36.64	$p<.01$	Q89	小>中	11.19	$.05>p>.01$
Q47	小>中	15.87	$p<.01$	Q90	小>中	13.34	$p<.01$
Q48	小>中	15.54	$p<.01$	Q92	小>中	29.16	$p<.01$
Q50	小>中	13.20	$.05>p>.01$	Q93*	小>中	14.53	$p<.01$
Q51	小>中	25.21	$p<.01$				

* 逆得点項目

e) 経験年数別

前研究(1989)では、経験年数によって成長がなされる部分と経験年数だけでは得られない部分、すなわち、中間の経験年数において低下する成長の部分があることが推測できたが、それらの関係が十分には把握できなかった。そこで、本研究では、経験年数を3段階、すなわち、

①8年以下、②9年-14年、③15年以上、に分け、各項目への反応分布の違いを χ^2 検定によって検討してみた。その結果、ここでも予想以上に多くの有意差項目を見出した。すなわち、95項目中59項目にのぼり(1%以下の危険率を示すものが37項目、5%以下の危険率を示すものが22項目)、大きな違いがあることがわかった。

Table 6 各項目反応の経験年数別比較 (有意差を示したもののみ)

項目番号	肯定的反応の方向	χ^2	危険率	項目番号	肯定的反応の方向	χ^2	危険率
Q 1	短<中<長	23.06	$p<.01$	Q49	短<中<長	38.54	$p<.01$
Q 2	短<中<長	36.18	$p<.01$	Q53	中<短<長	17.34	$.05>p>.01$
Q 3	中<短<長	24.33	$p<.01$	Q54	短<中<長	55.71	$p<.01$
Q 5	中<短<長	15.97	$.05>p>.01$	Q55	中<短<長	19.94	$.05>p>.01$
Q 6	短<中<長	36.74	$p<.01$	Q56	短<中<長	21.60	$p<.01$
Q 7	短<中<長	20.61	$p<.01$	Q57	短<中<長	15.97	$.05>p>.01$
Q10*	長<短<中	17.90	$.05>p>.01$	Q58	短<中<長	41.01	$p<.01$
Q11	短<中<長	35.08	$p<.01$	Q59	短<中<長	50.50	$p<.01$
Q12	短<中<長	47.80	$p<.01$	Q60	中<短<長	42.03	$p<.01$
Q15	短<中<長	16.37	$.05>p>.01$	Q61	中<短<長	18.35	$.05>p>.01$
Q16	短<中<長	42.37	$p<.01$	Q63	短<中<長	34.19	$p<.01$
Q17*	長<中<短	19.27	$.05>p>.01$	Q64	中<短<長	17.67	$.05>p>.01$
Q19	中<短<長	16.97	$.05>p>.01$	Q66	短<中<長	25.47	$p<.01$
Q21	短<中<長	20.91	$p<.01$	Q68	短<中<長	18.83	$.05>p>.01$
Q22	短<中<長	13.99	$.05>p>.01$	Q69	中<短<長	16.53	$.05>p>.01$
Q23	短<中<長	25.27	$p<.01$	Q71	短<中<長	24.05	$p<.01$
Q25	短<中<長	19.65	$.05>p>.01$	Q72	短<中<長	23.06	$p<.01$
Q26	短<中<長	39.39	$p<.01$	Q73	短<中<長	23.10	$p<.01$
Q27	短<中<長	39.00	$p<.01$	Q75	短<中<長	19.54	$.05>p>.01$
Q28	短<中<長	24.61	$p<.01$	Q76	中<短<長	13.58	$.05>p>.01$
Q29	短<中<長	18.31	$.05>p>.01$	Q77*	長<中<短	22.29	$p<.01$
Q31	短<中<長	38.56	$p<.01$	Q79*	長<中<短	16.17	$.05>p>.01$
Q32	短<中<長	45.35	$p<.01$	Q81	中<短<長	18.10	$.05>p>.01$
Q34	短<中<長	25.53	$p<.01$	Q82	短<中<長	28.09	$p<.01$
Q36	短<中<長	42.93	$p<.01$	Q85	短<中<長	42.00	$p<.01$
Q38	中<短<長	17.30	$.05>p>.01$	Q86*	長<中<短	21.93	$p<.01$
Q41	短<中<長	41.26	$p<.01$	Q87	短<中<長	31.87	$p<.01$
Q42	中<短<長	21.86	$p<.01$	Q88	短<中<長	43.85	$p<.01$
Q46	短<中<長	19.38	$.05>p>.01$	Q92	短<中<長	40.69	$p<.01$
Q48	短<中<長	18.75	$.05>p>.01$				

* 逆得点項目

Table 6 に有意差を示した項目番号とその方向、 χ^2 の値、および危険率を上げることにする。

Table 6 の結果から、2つの傾向がみられた。1つは、経験年数が増加するにしたがって成長が高まるもので、有意性を示した59項目中45項目と大半を占めていた。この傾向については理解可能であるが、他の1つは、経験年数が9年から14年において成長が落ち、15年以上になると上昇するもので理解しにくい傾向である。それらの中には、職場の雰囲気、他の教師との接触、などによる成長、自分の生活態度や指導の在り方に対する反省などがみられる。この結果は前研究(1989)の結果から得ら

れた傾向を確認するものといえよう。

(3) 教師の役割意識の実態

教師の役割意識を10個の質問項目を用いて、それぞれ5段階の回答を求め、「そう思う」5点、「やや思う」4点、「どちらともいえない」3点、「あまり思わない」2点、「思わない」1点として平均とSDを算出した。結果はTable 7 に示す通りである。

Table 7 から「子どもを理解すること」「精神的にも経済的にも安定すること」「仕事に魅力を感じ、満足感をもつこと」の3つの項目に4.0以上が示されており、

これらを教師の主要な役割と考えていると思われ、次に、「教科内容を十分に理解させること」「相談助言などカウンセラーの役割をとること」に対して3.7以上を示しており、これらを第2の役割と考えていることがわかった。このことは、第1に、自分の生活態度を重視し、次に、教科や教科外指導を考えていると解釈される。

そこで、これらの教師の役割意識が性別、学校別、経験年数別でどのように違うかを検討してみるため、平均値の差をt検定およびF検定で分析してみた。

教師の役割意識の性差で有意なものは、10項目中2つで、「子ども集団のリーダーとしての役割をとること」では、男性が高く(男性 M=3.14, 女性 M=2.77, $.05 > p > .01$), 「子どもを理解すること」では女性が高い(男性 M=4.44, 女性 M=4.62, $.05 > p > .01$)。全体として男女差はあまりないと思われる。

ところが、小学校教師と中学校教師の間には一貫した傾向がみられ、小学校教師は中学校教師よりも、子どもを理解すること(小学 M=4.68, 中学 M=4.30, $p < .01$), 仕事に魅力を感じ満足感をもつこと(小学 M=4.27, 中学 M=3.92, $p < .01$)をより強く示していた。また、反応分布差を χ^2 検定によって検定してみる

と、この他に、小学校教師は中学校教師よりも、相談助言などカウンセラーの役割をとること($\chi^2 = 9.65, .05 > p > .01$)を高く評価しており、学級管理をうまくやること($\chi^2 = 13.26, .05 > p > .01$), 子ども集団のリーダーとしての役割をとること($\chi^2 = 13.42, p < .01$)を低く評価をしていた。

このことから、小学校教師と中学校教師の間には教師の役割意識がかなり違っていて、小学校教師は、子どもの理解と仕事への生きがいを重視し、中学校教師は子どもをまとめうまく管理することに重点を置いてしていると解釈できよう。

経験年数による教師の役割意識には違いがあるであろうか。経験年数8年以下, 9-14年, 15年以上の3グループにおいて有意な差を示した項目は、10項目中4項目あり、ある程度意識に違いがあることがわかった。すなわち、子ども集団のリーダーとして役割をとること($F = 7.37, p < .01$), 精神的にも経済的にも安定すること($F = 6.76, p < .01$), 教科内容を十分理解させること($\chi^2 = 5.10, p < .01$), 社会の代表者として、社会的規範や文化を伝達すること($F = 3.67, .05 > p > .01$), 子どものモデルとなるよう行動すること($F = 3.21, .05 >$

Table 7 教師の役割意識についての質問項目への反応

項 目	Mean	SD
1. 教師は、子どもに教科内容を十分理解させることが重要である。……………	3.97	1.01
2. 教師は、子どものモデルとなるよう行動することが重要である。……………	3.59	1.02
3. 教師は、学級管理をうまくやることが重要である。……………	3.47	1.12
4. 教師は、相談助言などカウンセラーの役割をとることが重要である。……………	3.72	0.93
5. 教師は、子ども集団のリーダーとしての役割をとることが重要である。……………	2.99	1.08
6. 教師は、社会の代表者として、社会的規範や文化を伝達することが重要である。……………	3.35	0.96
7. 教師は、父母や地域の人々に学校の立場を理解してもらうことが重要である。……………	3.44	1.02
8. 教師は、子どもを理解することが重要である。……………	4.51	0.70
9. 教師は、その仕事に魅力を感じ、満足感をもつことが重要である。……………	4.11	0.96
10. 教師は、精神的にも経済的にも安定することが重要である。……………	4.31	0.91

Table 8 教師の役割意識について経験別平均の比較(有意差を示すもののみ)

項 目	8年以下		9-14年		15年以上	
	M	SD	M	SD	M	SD
1. 子どもに教科内容を十分理解させること	3.74	1.16	3.89	1.01	4.24	0.83
2. 子どものモデルとなるよう行動すること	3.43	0.97	3.49	0.97	3.81	1.01
5. 子ども集団のリーダーの役割をとること	2.88	0.98	2.74	0.99	3.33	1.17
6. 社会的規範や文化を伝達すること	3.25	0.88	3.20	0.96	3.57	1.10
10. 精神的にも経済的にも安定すること	4.15	0.91	4.15	0.99	4.60	0.76

$p>.01$) などであり、その傾向は大体一貫しており、最初の8年と次の9年から14年ぐまではほとんど変わらないか、寧ろ低下するものもあるが、15年以上になるとずっと高くなっており、やや傾いたU字型を示している。この傾向は、前研究(1989)においてもある程度示唆されたところである。

その傾向は table 8に示される。

(4) 教師の成長の構造

原岡(1989)の研究で得られた教師の成長に関連する多様な内容を含む95個の質問項目の反応から、それがどのような内容と構造をもっているかを確かめるため、因

子分析(主成分分析, バリマックス回転)を用いて因子を抽出し、それらの信頼性と意味づけを検討することにした。

その結果、4つの因子が抽出されたが、第Ⅰ因子は25項目からなっていて、これを「教育指導への自信と成長」と命名し、第Ⅱ因子は17項目からなっていて、「同僚・先輩・職場の雰囲気による成長」と命名し、第Ⅲ因子は10項目からなっていて、「幅広い人間としての成長」と命名し、さらに、第Ⅳ因子は9項目からなっていて、「教育指導への悩み」と命名した。

これらの因子負荷行列を挙げると、Table 9のようになる。

Table 9 教師の成長の因子負荷行列

項目番号	因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ	因子Ⅳ	共通性
1	0.62866	-0.03757	-0.06446	-0.25319	0.46489
2	0.60871	0.16573	0.19823	-0.23987	0.49482
3	0.48469	0.15516	0.26496	-0.13624	0.34776
4	0.35089	0.01233	0.37596	-0.01251	0.26478
5	0.16552	0.45186	0.25764	0.16781	0.32661
6	0.66325	0.01339	0.15201	-0.29659	0.55115
7	-0.03311	-0.15655	-0.00015	0.07107	0.03066
8	-0.26887	0.04375	0.01118	0.53668	0.36236
9	0.20897	0.35507	0.39398	0.01837	0.32530
10	0.01374	-0.62417	0.07839	0.21519	0.44224
11	0.61826	0.04639	0.19470	-0.35473	0.54814
12	0.51820	0.22139	0.22971	-0.22563	0.42121
13	-0.27387	0.00488	0.03390	0.66300	0.51575
14	0.19179	0.05376	0.13202	0.01254	0.05726
15	0.18238	0.30691	0.29040	-0.04190	0.21355
16	0.69382	0.08585	0.05670	-0.27980	0.57026
17	-0.24581	-0.15076	-0.05730	0.50027	0.33670
18	-0.30960	-0.04616	-0.07596	0.60511	0.46991
19	0.17713	0.05993	0.44214	0.13605	0.24897
20	0.15923	0.09486	0.14038	0.39400	0.20930
21	0.67927	-0.00677	-0.01637	-0.26621	0.53259
22	0.40459	0.12987	0.37829	-0.15272	0.34699
23	0.48285	0.03173	0.33046	-0.11931	0.35759
24	0.11214	-0.05833	0.61701	-0.01226	0.39917
25	0.31322	-0.34195	0.04227	0.12711	0.23298
26	0.70093	-0.00149	0.12406	-0.24853	0.56846
27	0.48435	0.23613	0.45460	-0.13808	0.51608
28	0.45532	0.03144	0.40693	-0.05660	0.37711

教師の成長と役割意識に関する研究

29	0.30785	-0.02367	0.58390	-0.06203	0.44012
30	0.18082	- 0.45576	-0.25853	0.39878	0.46627
31	0.64802	-0.00459	0.07358	-0.14397	0.44610
32	0.48704	0.19224	0.44576	-0.03048	0.47379
33	-0.04075	0.12639	-0.05985	0.32775	0.12864
34	0.16849	0.16424	0.64459	0.00988	0.47096
35	0.19069	-0.40046	-0.12530	0.33710	0.32607
36	0.64671	0.01299	0.12916	-0.17235	0.46479
37	-0.06140	-0.10857	-0.19016	0.39611	0.20862
38	0.33093	0.11379	0.40092	0.04827	0.28553
39	0.02821	0.20579	0.61630	-0.07679	0.42887
40	0.12077	- 0.60846	-0.11908	0.32310	0.50338
41	0.71878	0.05489	0.12396	-0.15558	0.55923
42	0.30064	0.34984	0.48125	0.03906	0.44590
43	0.12584	0.11900	0.51111	-0.05990	0.29482
44	0.29786	0.05313	0.59384	-0.03456	0.44538
45	0.05047	- 0.59363	-0.00488	0.11613	0.36845
46	0.33377	0.48752	0.20358	-0.14370	0.41118
47	0.39294	0.28983	0.44178	-0.10604	0.44482
48	0.45058	0.25836	0.46023	-0.15550	0.50576
49	0.70386	-0.01382	0.18001	-0.13881	0.54729
50	0.28469	0.48115	0.19618	0.15278	0.37438
51	0.33745	0.49051	0.33510	-0.06678	0.47123
52	0.26661	0.29838	0.53944	-0.03652	0.45244
53	0.30512	0.06333	0.39297	0.16180	0.27772
54	0.41732	0.11791	0.20070	-0.01414	0.22854
55	0.25560	0.71824	0.12509	0.06662	0.60129
56	0.52462	0.32814	0.38389	-0.10289	0.54086
57	0.34890	0.29062	0.51792	-0.09102	0.48273
58	0.56727	0.13714	0.21281	-0.20223	0.42679
59	0.52807	0.15239	0.21113	-0.02304	0.34719
60	0.29427	0.51172	0.10664	0.12754	0.37610
61	0.26841	0.58699	0.31825	0.02145	0.51834
62	0.12853	0.12119	-0.04297	0.27029	0.10611
63	0.55288	0.17135	0.03014	0.03426	0.33712
64	0.17116	0.69474	0.06004	-0.06239	0.51946
65	0.46734	0.23161	0.20211	-0.06000	0.31651
66	0.28812	0.07169	0.18038	0.05230	0.12343
67	0.45686	0.39453	0.29136	-0.06610	0.45364
68	0.33975	0.55583	0.10652	0.09428	0.44461
69	0.51631	0.22888	0.08347	0.01247	0.32609
70	-0.16141	0.13844	0.26846	0.45706	0.32619
71	0.45343	0.41356	0.14038	-0.08496	0.40356
72	0.57744	0.25367	0.31211	-0.08227	0.50197
73	0.36479	0.55175	0.01690	0.13782	0.45678
74	-0.14401	-0.09870	0.06153	0.49909	0.28336

原 著

75	0.33150	0.31477	0.12372	0.08285	0.23114
76	0.19627	0.22537	0.33792	0.05226	0.20624
77	-0.32352	-0.05598	0.06545	0.59882	0.47067
78	0.01442	0.34799	0.23476	0.13280	0.19406
79	-0.08252	-0.09390	-0.06844	0.29160	0.10534
80	-0.09173	-0.46030	-0.05234	0.39465	0.37878
81	0.09616	0.61806	0.29848	0.11117	0.49270
82	0.46412	0.22477	0.25245	-0.15228	0.35285
83	-0.09926	- 0.52409	-0.05279	0.39135	0.44046
84	0.10475	0.64455	0.26149	-0.01018	0.49490
85	0.48085	0.17942	0.29778	-0.19102	0.38857
86	-0.19272	-0.31943	-0.13350	0.28518	0.23833
87	0.61998	0.16419	0.18011	-0.14182	0.46389
88	0.59000	0.11228	0.21228	-0.11688	0.41943
89	-0.07865	0.44918	0.32681	0.34693	0.43512
90	-0.00480	0.29355	0.36096	0.10017	0.22652
91	-0.23769	-0.09115	-0.19520	0.42067	0.27988
92	0.50921	0.11527	0.23127	-0.01183	0.32620
93	-0.13085	0.00923	-0.00343	0.32585	0.12340
94	-0.02224	-0.03979	0.06464	0.17169	0.03573
95	-0.07448	-0.11894	0.08446	0.19272	0.06397
二乗和	13.75669	8.68035	7.53647	5.28903	35.26254
寄与率	14.48073	9.13721	7.93313	5.56740	37.11846
α 係数	0.94604	0.90735	0.86094	0.81483	

これらの因子負荷行列から、それぞれの因子に負荷が高く、しかも他の因子と重なるの少ない項目を選択すると、第I因子が25項目、第II因子が17項目、第III因子が10項目、第IV因子が9項目となった。これらの選択された項目については、Table 9の中でその数値を太字で示してある。また、それらの項目を用いて尺度を構成した場合の信頼度を α 係数で示している。4つの α 係数とも0.8以上であり、かなり安定したものと見なすことができる。

次に、測定しようとする因子とその尺度の各項目がどのように関連するか、すなわち、内部妥当性がどのようなかを検討するために、各尺度の総得点と各項目の相関を検討することにする。Table 10は、各因子毎の尺度の総得点（その項目得点を除いて、その因子を構成する他の項目の総得点）と各項目得点との相関を示したものである。

Table 10からわかるように、各因子を測定する尺度項目が、各総得点とかなり高い相関になっていることがわかる。因子Iでは、すべての項目が0.50以上の相関値

を示しており、因子IIでは、0.50以上の相関値を示すものは、17個中14個、因子IIIでは、10個中9個、因子IVでは、9個中5個となっている。このことから、それぞれの尺度がかなり高い内の一貫性をもっていることがわかり、それぞれの選択された項目を用いて各因子を測定できるといえる。

測定尺度の内部妥当性を検討するに当たって、総得点と各項目の相関が高いことが望ましいが、その外に、各項目間の相関はある程度の高さは必要だが、あまり高い相関値でない方が望ましい。それは、各項目がそれぞれその尺度の違った側面を測定していて、全体として全領域をカバーしている方が望ましいからである。項目間の相関が高すぎるのは、極言すれば、それらの項目が同じ内容の質問であることになり、同じ項目を幾つも用いて同じ内容を測定する必要はないからである。そこで、各因子尺度ごとに項目間の相互相関を検討してみることにする。なお、逆方向の項目は、逆得点の採点法を用いている。

以上、Table 10からTable 14にわたる結果から、

教師の成長と役割意識に関する研究

Table 10 各因子毎の総得点と各項目の相関

項目番号	因子Ⅰ	項目番号	因子Ⅱ	項目番号	因子Ⅲ	項目番号	因子Ⅳ
Q 1	0.5941	Q 5	0.4758	Q19	0.4472	Q 8	0.5579
Q 2	0.6728	Q10	0.5609	Q24	0.6139	Q13	0.6623
Q 3	0.5634	Q30	0.4193	Q29	0.6366	Q17	0.5094
Q 6	0.7082	Q40	0.5809	Q34	0.6457	Q18	0.6242
Q11	0.6925	Q45	0.5260	Q39	0.5783	Q37	0.3389
Q12	0.6061	Q46	0.5325	Q42	0.5097	Q70	0.4319
Q16	0.7215	Q50	0.5480	Q43	0.5199	Q74	0.4857
Q21	0.6543	Q51	0.5936	Q44	0.6375	Q77	0.6070
Q23	0.5341	Q55	0.7543	Q52	0.5954	Q91	0.3954
Q26	0.7224	Q60	0.5571	Q57	0.5510		
Q31	0.6307	Q61	0.6619				
Q36	0.6619	Q64	0.7158				
Q41	0.7317	Q68	0.6036				
Q49	0.6908	Q73	0.5854				
Q56	0.6302	Q81	0.6202				
Q58	0.6394	Q83	0.4758				
Q59	0.5578	Q84	0.6547				
Q63	0.5159						
Q65	0.5257						
Q69	0.5114						
Q72	0.6322						
Q85	0.5973						
Q87	0.6737						
Q88	0.6394						
Q92	0.5540						

Table 11 第Ⅰ因子「教育指導への自信と成長」
についての項目間相関の範囲

相関値の範囲	相関の数
.60 - .69	7
.50 - .59	40
.40 - .49	125
.30 - .39	105
.20 - .29	23
計	300

Table 12 第Ⅱ因子「同僚・先輩・職場の
雰囲気による成長」についての
項目間相関の範囲

相関値の範囲	相関の数
.60 - .69	3
.50 - .59	22
.40 - .49	29
.30 - .39	47
.20 - .29	23
.10 - .19	12
計	136

Table 13 第Ⅲ因子「幅広い人間としての成長」
についての項目間相関の範囲

相関値の範囲	相関の数
.60 - .69	1
.50 - .59	8
.40 - .49	4
.30 - .39	25
.20 - .29	7
計	45

Table 14 第Ⅰ因子「教育指導への悩み」
についての項目間相関の範囲

相関値の範囲	相関の数
.50 - .59	3
.40 - .49	8
.30 - .39	9
.20 - .29	11
.10 - .19	5
計	36

教師の成長に関する4つの因子について、それぞれ信頼性と妥当性のある尺度が得られたことになる。つまり、各因子とも、尺度値の総点と各項目の相関がかなり高く、しかも各項目間の相関が高過ぎず、適度の相関が得られているといえるであろう。

そこで、それぞれの尺度の内容を検討し、次のように

命名した。すなわち、第Ⅰ因子「教育指導への自信と成長」、第Ⅱ因子「同僚・先輩・職場の雰囲気による成長」、第Ⅲ因子「幅広い人間としての成長」、第Ⅳ因子「教育指導への悩み」である。次に、これらの尺度とその内容項目を上げ、尺度の信頼係数（ α 係数）、平均値、標準偏差を合わせて示すことにする。

a) 教師の成長に関する4つの尺度内容と測定項目

1) 第Ⅰ因子「教育指導への自信と成長」についての測定項目

(25項目, $\alpha = 0.9460$, 5段階評定, 尺度値平均=3.5749, SD=0.6146)

1. 何とか思いどおりの授業ができるようになった。
2. 子どもと接することによって、子どもの気持ちが理解できるようになった。
3. さまざまな場面で失敗と反省を繰り返すことによって成長してきた。
4. 自分の指導の効果が子どもに見られるようになった。
5. 自分の指導に対し、子どもが手ごたえある反応をするようになってきた。
6. 子どもたちの反応から指導の仕方や関わり方が次第にわかってきた。
7. 自分なりの学級経営ができるようになってきた。
8. 納得いく教科指導ができるようになってきた。
9. 自分で目標をたて、常にその実践に向けて努力している。
10. 目的に応じ適切な指導法を用いることができるようになってきた。
11. 押し付けたり脅したりしないで、子どもを指導していける自信がついた。
12. 子どもの理解力に応じ、自然に指導法を変えることができるようになった。
13. 授業を通して、その子に応じた何かを教えられるようになった。
14. 新しい社会の流れをとらえて、適切な指導ができるようになった。
15. 教育経験を積むことによって、自分自身人間として成長できた。
16. 自分の役割が何で今やるべきことは何かがわかるようになった。
17. 家庭での子どもたちの生活についても理解できるようになった。
18. 学校外での子どもの行動が理解できるようになった。
19. 教科指導の方法を学んでいくうちに、専門的知識も深まった。
20. 教材研究を徹底して行うことによって、授業がうまくできるようになった。
21. 子どもとともに問題にぶつかることにより、子どもの問題が解決できるようになった。
22. どの子どもにも良い点を見つけることができるようになった。
23. 経験を積むことで、学級経営のやり方が上手になった。
24. 子どもの教育にあたって、子ども一人ひとりの個性を尊重することができるようになった。
25. いろいろな学年を担当することによって、教え方や心構えに幅ができてきた。

2) 第II因子「同僚・先輩・職場の雰囲気による成長」についての測定項目

(21項目, $\alpha = 0.9074$, 5段階評定, 尺度値平均=3.6413, SD=0.6450, *逆得点項目)

1. 他の先生たちの努力する姿が刺激となり, 自分も大いに影響された。
2. 学校の雰囲気が自分に合わないので, やる気をなくすことがある。 (*)
3. 自分だけ努力しても他の教師から浮き上がってしまうので何もできない。 (*)
4. 職場に, 一人ひとりの自主性を尊重する雰囲気がないのでやる気がしない。 (*)
5. 先生方の考えがみんなばらばらなので, 教育効果があがらない。 (*)
6. 研修会に参加することによって, 生徒への接し方や指導法が向上した。
7. みんなが協力して良い教育をしようとするので, 自分も努力するようになった。
8. いろんな先生の指導法を見ることによって自分の指導法が向上した。
9. 職場に協力の雰囲気があるので, 学校のいろいろな仕事ができようになった。
10. 職場に誰でも受容する雰囲気があるので, 寛容や忍耐力が身についてきた。
11. 他の先生方との日頃の接触により自分の成長が促された。
12. どんな先生とも気軽に話せる雰囲気があるので, みんなと協調してやっていける。
13. みんなの教師が仕事に積極的に取り組むので, 自分も積極的な心構えができてきた。
14. 職場に, 一人ひとりを大切にする雰囲気があるので, 自分の考えと違う考えでも受け入れることができるようになった。
15. 先輩の先生からいろいろ教えられ, 多くのことを学ぶことができた。
16. 研究会やグループ研究に出席しても自分のためになることが少ない。 (*)
17. 同僚の先生との接触によって, 多くのことを学ぶことができた。

3) 第III因子「幅広い人間としての成長」についての測定項目

(10項目, $\alpha = 0.8609$, 5段階評定, 尺度値平均=4.1743, SD = 0.5707)

1. 自分の行動や生活態度などいつも反省するよう努めている。
2. できるだけ幅広い分野へ興味や関心をもつように努めている。
3. 専門的知識だけでなく, 幅広い分野の知識を得よう心がけている。
4. 教育のことだけでなく, 幅広い人間になるよう努めている。
5. 教育以外の分野にも, 幅広い視野をもつことが大切だと感じている。
6. 子どもと一緒に学習することが, 自分の成長にもなった。
7. 現状の子どもの姿に満足せず, より高い成長を考えている。
8. 一般社会の領域にも関心や問題意識をもつようになった。
9. いろいろな子どもに出会うことで子どもの多様性がわかってきた。
10. 子どもと共に悩み, 喜び, 励まし合っていくことが自分にとって大切なことがわかった。

4) 第IV因子「教育指導への悩み」についての測定項目

(9項目, $\alpha = 0.8148$, 5段階評定, 尺度値平均=2.9475, SD=0.7126)

1. 失敗の繰り返しばかりで, なかなか成長できない。
2. 努力してもなかなか成長できず悩んでいる。
3. 子どもの生活の中に入っていけばいくほど, 指導の在り方がわからなくなる。
4. 努力してもなかなか成長できず悩んでいる。
5. 子どもに密着していると, かえって子どもの真の姿を見失うことがある。
6. 一生懸命やってみても, なかなか思い通りの授業ができない。
7. 他の先生の立派な授業を見ても, それを自分の授業に生かすことができない。
8. 努力しても, 学級経営はなかなかうまくいかない。
9. 専門教科を勉強しても授業に生かすことはなかなかできない。

b) 各因子尺度間の相互相関

教師の成長について4つの因子が抽出されたが, それらの因子間にどのような関係があるかを確かめるため相互相関を算出した。その結果は Table 15 に示す通りである。

Table 15 の結果, 4つの尺度はかなり明確に分かれたが, それらの間にはかなりの程度の相関がみられた。特に, 教育指導への自信と成長である第I尺度は, 他の尺度とかなり高い相関をもっていて, 教師の成長の主要な要因であるように思われる。また, 第IV因子の尺度で

ある教育指導への悩みは、他の尺度と負の相関を示しているが、関連性はそれぞれ違い、独自の意味をもっているものと解釈できる。

c) 各尺度における性差

教師の成長について両性間で違いがあるかどうか確かめるために、因子毎に性別による得点の比較を行うことにする。

Table 16 から、第 I 因子と第 IV 因子とに性差がみられる。つまり、教育指導への自信と成長については男性の方が高く、教育指導への悩みについては女性の方が高くなっていることがわかる。その意味では、男性の方がより高く適応していると解釈することもできよう。

d) 各尺度における小学校教師と中学校教師の比較

次に、小学校教師と中学校教師とでは教師の成長のどの尺度においてどのように違うであろうか。この点については、各項目についての反応においてかなりの違いがみられたことから、次元毎に検討してみる必要がある。Table 17 はそれらの結果を示したものである。

Table 17 からわかるように、小学校教師と中学校教師の間に、4 つの尺度とも有意な差がみられ、その傾向に一貫性があった。すなわち、教育指導への自信と成長、

同僚・先輩・職場の雰囲気による成長、幅広い人間としての成長の 3 つの尺度において、小学校教師の方が有意に高い得点をとっており、教育指導への悩みについては中学校教師の方が高い得点をとっていた。中学校教師は小学校教師に比べ、いろいろな面で問題を感じていると考えてよからう。また、小学校教師の方が教育指導により生きがいを感じているものが多いと解釈できよう。

e) 各因子尺度における経験年数別比較

次に、経験年数の違いによって、教師の成長に違いがあるかどうかを 4 つの因子尺度毎に検討してみることにする。

Table 18 からわかるように、経験年数の違いは、教師の成長の 4 つの尺度すべてにおいて有意な差があることがわかった。ところがこれらの有意差には 3 つの傾向がみられる。第 1 は、経験年数と共に成長度が高くなるもので、主要な要因である第 I 因子の「教育指導への自信と成長」である。第 2 の傾向は、中間的経験層、すなわち、9-14 年で低下し、15 年以上になると上昇するもので、第 II 因子の「同僚・先輩・職場の雰囲気による成長」と第 3 因子の「幅広い人間としての成長」である。第 3 の傾向は、第 2 の傾向の裏返しで、中間経験層にお

Table 15 4 つの尺度間の相互相関と平均、標準偏差

	第 I 因子	第 II 因子	第 III 因子	第 IV 因子	N	Mean	SD
第 I 因子	1.0000				237	3.575	0.615
第 II 因子	0.4408	1.0000			237	3.641	0.645
第 III 因子	0.5381	0.4717	1.0000		237	4.174	0.571
第 IV 因子	-0.5216	-0.2236	-0.1672	1.0000	237	2.948	0.713

Table 16 各因子尺度平均得点の性別比較

		n	Mean	SD	t	p
第 I 因子	男性	140	3.69	0.59	3.67	0.001 **
	女性	97	3.40	0.61		
第 II 因子	男性	140	3.70	0.62	1.60	0.110
	女性	97	3.56	0.67		
第 III 因子	男性	140	4.19	0.57	0.44	0.660
	女性	97	4.15	0.57		
第 IV 因子	男性	140	2.85	0.69	2.45	0.016 *
	女性	97	3.08	0.72		

教師の成長と役割意識に関する研究

Table 17 各因子尺度平均得点の小学・中学別比較

		n	Mean	SD	t	p
第Ⅰ因子	小学	131	3.74	0.58	4.65	0.001 **
	中学	106	3.38	0.60		
第Ⅱ因子	小学	131	3.88	0.53	6.81	0.001 **
	中学	106	3.35	0.66		
第Ⅲ因子	小学	131	4.34	0.47	5.37	0.001 **
	中学	106	3.97	0.62		
第Ⅳ因子	小学	131	2.84	0.79	2.49	0.013 *
	中学	106	3.07	0.59		

Table 18 各因子尺度平均得点と経験年数

		n	Mean	SD	F	p
第Ⅰ因子	8年以下	65	3.33	0.51	35.83	0.001 **
	9-14年	88	3.38	0.64		
	15年以上	84	3.97	0.44		
第Ⅱ因子	8年以下	65	3.69	0.59	11.61	0.001 **
	9-14年	88	3.40	0.66		
	15年以上	84	3.85	0.58		
第Ⅲ因子	8年以下	65	4.12	0.55	5.70	0.001 **
	9-14年	88	4.06	0.60		
	15年以上	84	4.34	0.52		
第Ⅳ因子	8年以下	65	2.94	0.68	3.11	0.046 *
	9-14年	88	3.08	0.69		
	15年以上	84	2.81	0.74		

Table 19 教師の成長要因と役割意識の相関

	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10
因子Ⅰ	0.177	0.248	0.024	0.242	0.228	0.264	0.187	0.248	0.416	0.212
因子Ⅱ	0.083	0.204	0.053	0.203	0.131	0.226	0.046	0.290	0.231	0.067
因子Ⅲ	0.087	0.204	0.127	0.249	0.077	0.243	0.066	0.469	0.387	0.073
因子Ⅳ	-0.017	0.013	0.030	-0.044	0.052	-0.037	0.027	-0.021	-0.182	0.024

Table 20 教師成長の4つの尺度における人数, 平均および標準偏差

	第Ⅰ因子			第Ⅱ因子			第Ⅲ因子			第Ⅳ因子		
	n	M	SD	n	M	SD	n	M	SD	n	M	SD
上位群	83	4.18	0.28	76	4.34	0.25	87	4.71	0.17	79	3.85	0.35
中位群	76	3.62	0.14	81	3.71	0.15	63	4.24	0.10	74	3.05	0.18
下位群	78	2.89	0.42	80	2.91	0.37	87	3.59	0.47	84	2.30	0.35

いて上昇し、15年以後に下降するもので、第IV因子の「教育指導への悩み」である。このことから、中間経験層では、年数を経るごとに教育指導への自信が増加するが、一方において、教育指導への悩みを抱えて迷っている状態であり、15年以上経つとそれらを解決し、教師として成長し生きがいを感じるようになると思われる。

(5) 教師の成長と役割意識の関係

これまでの結果からわかるように、教師の成長は、性別や経験年数など客観的特性によってある程度解釈できるが、それだけでは十分ではない。そこで考えられるのが教育に対する意識や態度であろう。原岡(1983)は教師の役割について述べ、その中に、10個の役割を挙げている。これに基づいて質問項目をつくり教師の役割意識を測定した。回答は「そう思う」から「思わない」までの5段階で求め、「そう思う」5点、「やや思う」4点、「どちらともいえない」3点、「あまり思わない」2点、「思わない」1点とした。これらの役割意識の得点と教師の成長の4つの尺度との関係を検討することにする。

a) 教師の成長要因と役割意識の相関関係

教師の成長の4つの尺度得点と上述の10個の役割意識得点との間の相関関係は Table 19 のとおりである。

Table 19 からわかることは、因子 I はどの役割とも

ある程度の相関を示しているが、因子IVにはほとんど有意な相関がみられない。因子IIと因子IIIとはその中間にある。因子Iと特に高い相関を示しているのはQ9 ($r=0.416$)であり、教育指導への自信と成長は仕事に魅力を感じ満足感をもつことと強い関連をもっているといえよう。また、因子IIIと高い相関を示しているのは、Q8 ($r=0.469$)とQ9 ($r=0.387$)であり、幅広い人間としての成長が、子どもを理解することと仕事に魅力を感じ満足感をもつことと強い関係があることがわかる。これに対し、教育指導への悩みの高さは役割意識とほとんど関係がないことがわかる。

b) 教師の成長要因の程度と役割意識の関係

次に、教師成長要因の各尺度ごとに、その尺度得点の程度によって上位、中位、下位の3群に分け、それらの群間で10個の教師の役割意識得点の比較をおこない、それぞれの関係を明確にしてみることにする。

教師成長要因のそれぞれの尺度において、上位・中位・下位群の人数と平均、標準偏差はTable 20 のとおりである。

次に、教師の成長の4つの因子尺度得点の程度と教師の役割意識調査の10個の質問項目への個々の反応の関係を分析してみることにする。

Table 21 から Table 24 までにそれらの関係が示され

Table 21 第I因子「教育指導への自信と成長」の程度と教師の役割意識項目への反応との関係

	上位群(N=83)		中位群(N=76)		下位群(N=78)		
	M	SD	M	SD	M	SD	
1. 教師は、子どもに教科内容を十分理解させることが重要である。	4.11	1.01	4.00	0.92	3.79	1.08	F=1.985 p=0.1396
2. 教師は、子どものモデルとなるように行動することが重要である。	3.87	1.10	3.59	0.98	3.28	1.02	F=6.902 p=0.0012 **
3. 教師は、学級管理をうまくやることが重要である。	3.47	1.25	3.55	0.94	3.41	1.13	F=0.313 p=0.7317
4. 教師は、相談助言などカウンセラーの役割をとることが重要である。	4.00	0.95	3.67	0.74	3.46	1.02	F=7.170 p=0.0010 **
5. 教師は、子ども集団のリーダーとしての役割をとることが重要である。	3.25	1.26	3.00	0.89	2.69	0.97	F=5.647 p=0.0040 **
6. 教師は、社会の代表者として、社会的規範や文化を伝達することが重要である。	3.65	1.03	3.29	0.80	3.08	0.96	F=7.7182 p=0.0006 **
7. 教師は、父母や地域の人々に学校の立場を理解してもらうことが重要である。	3.61	1.08	3.52	0.97	3.18	0.96	F=4.120 p=0.0174 *
8. 教師は、子どもを理解することが重要である。	4.75	0.51	4.49	0.68	4.28	0.82	F=9.444 p=0.0001 **
9. 教師は、その仕事に魅力を感じ、満足感をもつことが重要である。	4.51	0.69	4.08	0.93	3.73	1.08	F=14.687 p=0.0001 **
10. 教師は、精神的にも経済的にも安定することが重要である。	4.48	0.85	4.33	0.82	4.10	1.03	F=3.581 p=0.0294 *

教師の成長と役割意識に関する研究

Table 22 第II因子「同僚・先輩・職場の雰囲気による成長」の程度と教師の役割意識項目への反応との関係

	上位群(N=76)		中位群(N=81)		下位群(N=80)	
	M	SD	M	SD	M	SD
1. 教師は、子どもに教科内容を十分理解させることが重要である。	4.12	1.02	3.90	0.90	3.90	1.11
			F=1.1192		p=0.3054	
2. 教師は、子どものモデルとなるように行動することが重要である。	3.74	1.05	3.70	0.86	3.33	1.11
			F=4.061		p=0.0185*	
3. 教師は、学級管理をうまくやることが重要である。	3.46	1.25	3.54	1.05	3.43	1.06
			F=0.235		p=0.7906	
4. 教師は、相談助言などカウンセラーの役割をとることが重要である。	3.83	1.05	3.81	0.81	3.51	0.91
			F=2.953		p=0.0541	
5. 教師は、子ども集団のリーダーとしての役割をとることが重要である。	3.01	1.24	3.11	1.00	2.83	0.99
			F=1.329		p=0.2667	
6. 教師は、社会の代表者として、社会的規範や文化を伝達することが重要である。	3.46	1.12	3.43	0.85	3.15	0.89
			F=2.542		p=0.0809	
7. 教師は、父母や地域の人々に学校の立場を理解してもらうことが重要である。	3.41	1.16	3.57	0.87	3.35	1.03
			F=0.981		p=0.3765	
8. 教師は、子どもを理解することが重要である。	4.79	0.44	4.46	0.65	4.03	0.86
			F=10.548		p=0.0001**	
9. 教師は、その仕事に魅力を感じ、満足感をもつことが重要である。	4.29	0.94	4.20	0.81	3.86	1.08
			F=4.439		p=0.0128*	
10. 教師は、精神的にも経済的にも安定することが重要である。	4.38	0.94	4.37	0.73	4.18	1.04
			F=1.289		p=0.2775	

Table 23 第III因子「幅広い人間としての成長」の程度と教師の役割意識項目への反応との関係

	上位群(N=87)		中位群(N=63)		下位群(N=87)	
	M	SD	M	SD	M	SD
1. 教師は、子どもに教科内容を十分理解させることが重要である。	4.07	1.05	3.98	1.02	3.86	0.97
			F=0.912		p=0.4032	
2. 教師は、子どものモデルとなるように行動することが重要である。	3.77	1.12	3.70	0.98	3.32	0.91
			F=4.833		p=0.0088**	
3. 教師は、学級管理をうまくやることが重要である。	3.46	1.26	3.79	1.05	3.26	0.97
			F=4.221		p=0.0158*	
4. 教師は、相談助言などカウンセラーの役割をとることが重要である。	3.91	1.02	3.83	0.85	3.45	0.85
			F=6.092		p=0.0026**	
5. 教師は、子ども集団のリーダーとしての役割をとることが重要である。	3.01	1.28	3.25	0.98	2.77	0.87
			F=3.794		p=0.0239*	
6. 教師は、社会の代表者として、社会的規範や文化を伝達することが重要である。	3.54	1.10	3.35	0.95	3.15	0.79
			F=3.650		p=0.0275*	
7. 教師は、父母や地域の人々に学校の立場を理解してもらうことが重要である。	3.44	1.16	3.52	0.93	3.39	0.94
			F=0.310		p=0.7334	
8. 教師は、子どもを理解することが重要である。	4.83	0.53	4.62	0.55	4.11	0.77
			F=28.719		p=0.0001**	
9. 教師は、その仕事に魅力を感じ、満足感をもつことが重要である。	4.43	0.96	4.17	0.93	3.76	0.88
			F=11.595		p=0.0001**	
10. 教師は、精神的にも経済的にも安定することが重要である。	4.38	1.01	4.34	0.92	4.21	0.79
			F=0.863		p=0.4234	

Table 24 第IV因子「教育指導への悩み」の程度と教師の役割意識項目への反応との関係

	上位群(N=84)		中位群(N=74)		下位群(N=84)	
	M	SD	M	SD	M	SD
1. 教師は、子どもに教科内容を十分理解させることが重要である。	3.90	1.15	4.03	0.91	3.99	0.98
			F=0.323		p=0.7241	
2. 教師は、子どものモデルとなるように行動することが重要である。	3.57	1.07	3.49	1.02	3.69	0.98
			F=0.795		p=0.4526	
3. 教師は、学級管理をうまくやることが重要である。	3.38	1.25	3.51	1.05	3.54	1.05
			F=0.452		p=0.6369	
4. 教師は、相談助言などカウンセラーの役割をとることが重要である。	3.75	0.99	3.72	0.90	3.69	0.92
			F=0.073		p=0.9293	
5. 教師は、子ども集団のリーダーとしての役割をとることが重要である。	2.91	1.17	2.88	0.98	3.15	1.07
			F=1.591		p=0.2059	
6. 教師は、社会の代表者として、社会的規範や文化を伝達することが重要である。	3.33	1.03	3.32	0.89	3.38	0.97
			F=0.0852		p=0.9184	
7. 教師は、父母や地域の人々に学校の立場を理解してもらうことが重要である。	3.38	1.08	3.49	0.85	3.46	1.11
			F=0.235		p=0.7906	
8. 教師は、子どもを理解することが重要である。	4.61	0.59	4.31	0.89	4.59	0.58
			F=4.454		p=0.0126*	
9. 教師は、その仕事に魅力を感じ、満足感をもつことが重要である。	4.29	0.91	4.05	0.96	4.00	0.99
			F=2.096		p=0.1252	
10. 教師は、精神的にも経済的にも安定することが重要である。	4.215	0.96	4.39	0.82	4.32	0.95
			F=0.728		p=0.4837	

ている。

Table 21 から Table 24 まででわかることは、教師の役割意識と深い関連をもつ教師の成長次元は、第I因子の「教育指導への自信と成長」と第III因子の「幅広い人間としての成長」であり、第II因子の「同僚・先輩・職場の雰囲気による成長」はやや関連をもっていることがわかる。しかし、第IV因子の「教育指導への悩み」はほとんど関連がないことがわかった。役割意識の中で3つの因子と特に関連があるものは、「子どもを理解すること」「仕事に魅力を感じ満足感をもつこと」「子どものモデルとして行動すること」の3つであり、教師としての成長が教師の役割意識と深い関係にあることがわかった。

要 約

本研究では、教師の成長が現実にはどのような構造をなしているかを、小・中学校の教師を対象に質問紙を用いて調査し、その結果を因子分析して、教師の成長を構成している次元を明確にし、それらの次元における違いが、性別、小・中学校の違い、経験年数の違いなどによってどのようなものであるかを確かめると共に、教師の役割とと思われる10個の役割とどのような関係をもっ

ているかを吟味しようとするものである。

被調査者は、小・中学校教師 237名で、経験年数1年未満から20年以上にわたっており、男性140名、女性97名であった。調査項目は、前研究(1989)で用いた教師の成長に関する95個の質問項目と10個の教師の役割意識質問項目を用いた。

その結果、教師の成長の実態については次のようなことがわかった。

- ① 一般に、現在の教師は積極的に自己成長するよう努めており、個人も職場も成長力を高めるような働きをしていることがわかった。
- ② 男子教師は女子教師よりも教師としての成長の度が高い傾向を示した。
- ③ 小学校教師の方が中学校教師よりも成長の度が高い傾向を示した。
- ④ 経験年数については2つの傾向がみられた。1つは、経験年数が増加するにしたがって成長が高まるもので、他の1つは、経験年数9年から14年において低下し、15年以上になると上昇する傾向である。
- ⑤ 教師の役割意識については、小学校教師と中学校教師との間に違いがあり、小学校教師は、子どもの理解と仕事への生きがいを重視し、中学校教師は子どもを

まとめ管理することに重点を置いていると解釈された。

- ⑥ 役割意識に関する経験年数の違いについては、最初の8年と次の9年から14年まではほとんど変わらないが寧ろ低下するが、15年以上になるとずっと高くなっていた。

教師の成長の構造については、因子分析の結果、次のような4つの因子が抽出された。すなわち、第Ⅰ因子「教育指導への自信と成長」、第Ⅱ因子「同僚・先輩・職場の雰囲気による成長」、第Ⅲ因子「幅広い人間としての成長」、第Ⅳ「教育指導への悩み」である。各因子ごとに尺度を構成し、これについて、性別、小・中学校別、経験年数別で検討し、次のような関連を見出した。

- ① 「教育指導への自信と成長」については男性の方が高く、「教育指導への悩み」については女性の方が高くなっていて、男性の方が教師としての成長がより高いと解釈された。
- ② 小学校教師と中学校教師との間には4つの尺度とも有意な差がみられ、一貫した傾向があった。すなわち、「教育指導への自信と成長」、「同僚・先輩・職場の雰囲気による成長」、「幅広い人間としての成長」の3つの尺度において、小学校教師の方が有意に高く、「教育指導への悩み」については、中学校教師の方が高い得点をとっていた。この点から小学校教師の方が教師としての成長が高い傾向があるといつてよかろう。
- ③ 経験年数に関しては、3つの傾向がみられた。すなわち、「教育指導への自信と成長」は、経験年数と共に高くなり、「同僚・先輩・職場の雰囲気による成長」と「幅広い人間としての成長」は、中間的経験層でやや低下し、その後上昇し、「教育指導への悩み」は、これと逆で、中間的経験層で高くなり15年以上になると減少するものである。このことから、中間経験層では、教育指導への自信は増加しているが、悩みも高くなり、一時的迷いの状態にあり、15年以上になるとそれらを解決し、教師としての成長と生きがいを感じるものと解釈された。

教師の成長と役割意識についてはつぎのようなことがわかった。

- ① 「教育指導への自信と成長」は仕事に魅力を感じ満足感をもつことと強い関連をもっており、「幅広い人間としての成長」は、子どもを理解することおよび仕事に魅力を感じ満足感をもつことと強い関連があった。これに対し、「教育指導への悩み」は、教師の役割意識とはほとんど関連がないことがわかった。
- ② 教師の役割意識と深い関連をもつ教師の成長次元は、「教育指導への自信と成長」と「幅広い人間としての成長」であり、「同僚・先輩・職場の雰囲気による成長」は中程度の関連をもっていることがわかった。役割意識の中で3つの因子と特に関連があるのは、「子どもを理解すること」「仕事に魅力を感じ満足感をもつこと」「子どものモデルとして行動すること」の3つであり、教師としての成長が教師の役割意識と深い関係にあることがわかった。

参 考 文 献

- 原岡一馬 「教師論のこころみ」1983 佐賀大学教育学部編 『黒板を背にするとき』 北大路書房 Pp. 111-126.
- 原岡一馬 「自信を育てる学級 -リーダーとしての教師の役割を中心に-」, 1988, 長島貞夫編『子どもが見える先生』, 金子書房, Pp. 193-204.
- 原岡一馬 教師の自己成長に関する研究 1989, 名古屋大学教育学部紀要 -教育心理学科- Vol.36, 33-53.
- 原岡一馬 教師の自己成長に関する研究 1989 日本教育心理学会第31回総会研究発表論文集 368.
- 原岡一馬 『教師の成長を考える』 1990 ナカニシヤ出版

(1990年8月2日 受稿)

ABSTRACT

A Study into the Professional Growth Teachers and Their Role Consciousness

Kazuma HARAOKA

This study investigated the structure of professional growth of elementary and middle school teachers through a self-report questionnaire. Factor analysis was done to reveal the factors underlying the development of teachers, and differences in these dimensions were sought for sex, school type (elementary or middle), teaching experience, etc. In addition, differences for 10 aspects of teacher role consciousness were examined.

The subjects consisted of 237 elementary and middle school teachers, 140 of them male and 97 female, with experience ranging from one to more than 20 years. The questionnaire utilized consisted of the same items as the previous related study (Haraoka, 1989) on teacher growth, composed of 95 items, plus 10 additional role consciousness items.

The following observations were made pertaining to teacher growth:

1. Generally, present day teachers actively strive to develop themselves as teachers, and both individuals as well as the work environment are facilitative of this effort.
2. Male teachers display a higher extent of growth than their female counterparts.
3. Elementary school teachers tend to show more growth than middle school teachers.
4. As teachers gain more job experience, they extend their growth, but process loses momentum during the ninth and 14th years, only to resume acceleration from the 15th year.
5. There is a difference in the role perception of teachers between the two school levels, elementary school teachers tending to emphasize understanding their children and their work motivation, while their middle school counterparts stress classroom management and control.
6. In terms of role consciousness and teaching experience, there appears to be little difference, perhaps a slight drop, between the first stage of development (up to the eighth year) and the second stage (the ninth to the 14th year), but after the 15th year, much higher levels of consciousness can be seen.

The factor analysis of the growth items resulted in a structure composed of four factors: the first factor was called "teaching confidence and growth"; the second, "growth through the work environment and colleagues"; the third, "growth as person with a wide perspective"; and fourth, "teaching anxiety". Each factor served as scales to allow an analysis based on sex, school type and teaching experience. The results are summarized as follows.

1. For "teaching confidence and growth", males proved to be higher than females, while it was vice versa for "teaching anxiety". Therefore, it can be interpreted that males are more apt to have a higher level of growth as teachers than females.
2. For all four scales, statistically significant differences were attained between elementary and middle school teachers. The former were higher in growth for "teaching confidence and growth", "growth through the work environment and colleagues" and "growth as a person with a wide perspective", while the latter scored higher for "teaching anxiety". Subsequently, it can be said that elementary school teachers generally have superior growth compared to middle school teachers.
3. In terms of teaching experience, "teaching confidence and growth" increased with the number of

years on the job, while “growth through work environment and colleagues” and “growth as a person with a wide perspective” showed a slight decline in the intermediary years (ninth to 14th), and “teaching anxiety increased in the intermediary stage and declined after 15 years of experience. In interpreting these tendencies, it can be remarked that teachers in their intermediary years are increasing in confidence at the same time as they are increasing in anxiety, thus they may be in a state of confusion. However, once they have reached 15 or so years, they are capable of resolving their dissonance, and are able to find room for growth and motivation in their work.

The relationship between teacher growth and role consciousness can be summarized as follows:

1. “Teaching confidence and growth” was related strongly to “job attractiveness and satisfaction”, while “growth as a person with a wide perspective” correlated highly with that factor as well as “understanding toward children”. On the other hand, “teaching anxiety” had no relation to teacher role consciousness.
2. The growth factors with the strongest relationship to role consciousness were “teaching confidence and growth” and “growth as a person with a wide perspective”, while “growth through the work environment and colleagues” had a medial degree of relationship. The role consciousness aspects with the strongest relationship to the three above mentioned factors were “understanding toward children”, “job attractiveness and satisfaction” and “acting as a model to the children”. Evidently, a teacher’s growth is very closely related to his/her consciousness of a teacher’s role.